

# 公共的な発表空間としてのインターネットと外国語学習

— 電子掲示板を使ったドイツ語課題作文の試み<sup>1)</sup> —

岩崎克己

広島大学外国語教育研究センター

キーワード： CALL・自己発信・ドイツ語教育・インターネット

90年代の半ば以降、インターネットの普及は爆発的に進んだ。とりわけ、ここ1～2年の間に、各大学において自習用端末の導入が相次いだことにより、学生がネットワーク化されたコンピュータを利用し得る環境が急速に整備された。こうした情報環境の変化は、大学における外国語教育においても新しい可能性をもたらした。外国語学習への応用という観点から見ると、ネットワーク化されたコンピュータには、①チューター的な機能、②便利な道具としての機能、③公共的な発表や議論の場を提供する機能、④コミュニケーション手段としての機能、⑤情報源としての機能などのさまざまな可能性がある<sup>2)</sup>。

本稿では、そのひとつである「インターネットの公共的な発表空間としての機能」について着目し、広島大学における初級ドイツ語教育の場での課題作文を例にとり、こうした機能の外国語授業への応用可能性について論じる。CALL(Computer-Assisted Language Learning)という、しばしば、コンピュータのチューター的な機能のみが注目され、学習プログラムを使って行う機械的な練習というイメージが先行する<sup>3)</sup>。また、これまで、そうした利用法において、教授法的なあるいは教育理論的な裏付けが必ずしも明確にされてこなかったことから、今日における学習者中心型の授業コンセプトやコミュニケーション型教授法との整合性が問題にされることも多い。本稿では、こうした議論もふまえながら、ややもすればチューター的な機能に片寄りがちな外国語教育へのコンピュータの利用を、より広い枠組みのなかで考えるための事例を提供する。本稿の構成は以下のようになる。

1. 初級段階における自己発信型の課題作文
2. 電子掲示板を利用した作文指導
  - 2.1. 指導のステップと枠組みとなる条件
  - 2.2. 第1週の作業 —テーマと内容の構造化—
  - 2.3. 第2週の作業 —共同作業としての文法チェック—
  - 2.4. 電子掲示板への書き込み
3. 公共的な発表空間としてのインターネット
  - 3.1. 自己紹介の作文例
  - 3.2. 意義
  - 3.3. 問題点
4. おわりに

## 1. 初級段階における自己発信型の課題作文

一般に、初級者を対象にした作文練習というと、文脈から切り離された断片としての日本語文を、学習言語に置き換えるテクニカルな練習のイメージが強い。しかし、ここで問題にする「初級段階における自己発信型の課題作文」はそうではない。初級段階で習った文型、文法的知識、語彙および学習のストラテジー<sup>4)</sup>を総動員して、可能な限り意味のあるまとまった単位としての自己表現（コミュニケーション）を目指すそうという試みである。私見によれば、英語学習の経験を持つ大人の学習者を対象にした初修外国語授業<sup>5)</sup>の一部に、初期の段階での課題作文を組み込むことには、以下のような意義がある。

### 1) 学習の初期段階から学習者の知的な欲求に応え得る

口頭コミュニケーションの場合は、短い反応時間でのやりとりが中心になるが、初級段階では、発話を構造化する能力や活性化できる語彙に限りがある。そのため、授業における発話は、いわゆる対話のパターンに合わせ、単語をいくつか置き換えるという機械的な練習にとどまることが多い。また、発展的な応答や自発的な発話<sup>6)</sup>が現れる場合も、内容的に表現したいという欲求と実際の能力との落差が大きい。課題作文の場合、この点では時間的な余裕が与えられる。また、次々に空気の振動（＝音声）として消えていく発話とは異なり、書いたものを目の前の対象として分析することができ、また辞書などの適切な補助手段によって、語彙を補うことができるので、口頭コミュニケーションに比べると初級の段階でも表現できる内容にかなりの差がある。

### 2) 学習の初期段階から文法知識・既習語彙等の能動的な応用の機会が得られる

文を構成する（＝構造化する）という明確な目的のもとに意識的に文法的な知識が適応されるため、文法の受動的な理解やドリル等による機械的・形式的な練習とは異なり、表現のための手段として文法的な知識を適応する練習が初期の段階から可能になる。同じことは語彙や学習ストラテジーの適用に関しても言える。

### 3) 文字によるリアルタイム・コミュニケーション能力の養成

インターネットの普及により、e-mailの授受やchatプログラムへの参加という形で、あるいはまた外国語で書かれたホームページにアクセスして情報を得たり、オンラインで何かを注文したりなどの形で、音声ではなく文字を媒介としたリアルタイム・コミュニケーションを行う可能性がでてきた。これらは、文体的にも従来の通信文における書き言葉よりもむしろ話し言葉に近く、中間的なコミュニケーションの形態<sup>7)</sup>である。その意味で、書く・読むという形態で行われるコミュニケーション能力の持つ比重は、従来とは違った意味で重要性を増しており、こうした新しい形態のコミュニケーション能力を向上させること自体が、今日では新たな学習の目的となり得る。

さて、今回具体的に行った作業は、「3週間後の期限までに、各自がそれぞれ短文に換算して15文から20文程度の量の自己紹介の文章をドイツ語で書いて、インターネット上の電子掲示板<sup>8)</sup>に投稿する」という目標を定め、そのために必要な補助的作業を、授業のなかで行っていくというものである。次節以降では、今回行った作業を簡単に紹介すると共に、電子掲示板という表現

手段が、課題作文においてどのような効果をもたらしたかを見ていく。

## 2. 電子掲示板を利用した作文指導

### 2.1. 指導のステップと枠組みとなる条件

指導のステップとその枠組みとなる諸条件を簡単にまとめると以下のようになる。

#### 対象者

ドイツ語の学習を開始して2カ月半程度の学生<sup>9)</sup>

#### 学習の目的<sup>10)</sup>

文法：文記号，大文字書きと小文字書きの区別，一般動詞の現在形の活用，  
定形2位，倒置，不規則動詞\*，話法の助動詞\*，定冠詞および  
不定冠詞類と格変化\*，複数形\*，

語彙：40個の基本動詞<sup>11)</sup>，親族関係・大学生活・趣味・職業に関する名詞，  
1～100までの数詞等

場面：自分自身について語る・主観的な価値判断を表す

#### 技能

リーディングおよびライティング。

#### 指導に要した時間

授業2回分+授業外におけるe-mailでのやりとり

#### 指導のステップ

	項目	時間	作業内容	主たる作業形式
第1週	課題の提示	約10分	課題と電子掲示板の説明および質疑	クラス全体の作業
	テーマと内容の構造化1	約30分	アソシオグラム作成・基本表現の列挙	グループ作業・クラス全体の作業
	テーマと内容の構造化2	約30分	全体の構成を考える・相談する・ 教師に質問する・お互いに批評し合う	個別作業・パートナー作業
	草稿を書く	時間外 (1週間)	構成を考えながら書く・ e-mailによる質問	個別作業
第2週	文法チェック1	約5分×3回	文法チェック項目の確認	クラス全体の作業
	文法チェック2	約5分×3回	チェック項目に沿って例題を添削する	パートナー作業・クラス全体の作業
	文法チェック3	約15分	チェック項目に沿って各自の草稿を いっしょに添削する	パートナー作業
	草稿を書く	約20分	書き足す・推敲する・相談する・ 教師に質問する	個別作業・クラス全体の作業
	書き込みのデモ	約15分	掲示板への投稿の仕方のデモ	クラス全体の作業
	作文および提出	時間外 (2週間)	e-mailによる質問・ 電子掲示板への投稿・再投稿	個別作業

以下、この表の中の重要な項目を、各週の作業ごとに、より詳しく見ていく。

### 2.2. 第1週の作業 — テーマと内容の構造化 —

一般に、何の準備作業もさせず、ただ単に自己紹介を書かせようとしても、大部分の学生はすでに習った文を並べるだけであり、課題作文と呼べるような創造的な内容は、ほとんど期待でき

ない。以下は、その典型例である<sup>12)</sup>。ここでは、自分と家族の名前や出身地等をただ並べているに過ぎない。文法的な正確さと、意味のある情報を発信しようとする意志の欠如とが好対照な例である。

Guten Tag!

Ich heie Kenta Yamada. Meine Schwester heit Mika Yamada.

Ich komme aus Okayama. Meine Schwester kommt aus Okayama.

Ich wohne in Higashi-Hiroshima. Mein Vater wohnt in Okayama.

Ich studiere Wirtschaftswissenschaften.

Ich bin 19 Jahre alt. Meine Schwester ist 21 Jahre alt. Mein Vater ist 48 Jahre alt.

Ich spiele gern Basketball. Meine Schwester spielt Tennis. Mein Vater spielt gern Golf.

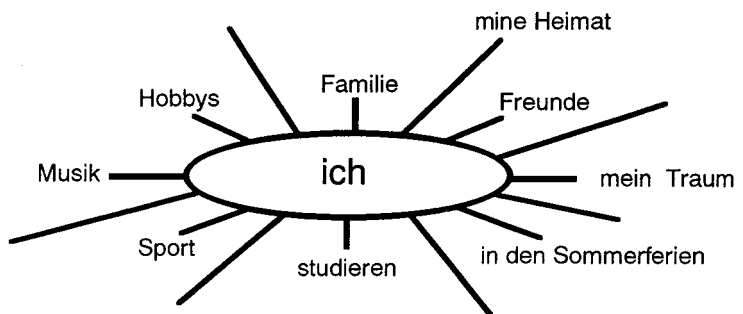
Danke.

この種の作文が産み出される理由は、第1に、授業の中で習った文型や対話のパターンを自己表現の手段として現実的に考えるという発想ができず、文法的にミスのない文を並べることだけに意識が集中していること、第2に、対話のパターンの練習のために習う短文レベルの文の算術的総和が文章(テキスト)ではないということが理解されていないことにある。そして第3の理由は、自己紹介というテーマに関して表現すべき内容を構造化して文章の形でまとめることが、そもそもうまくできないからである。

第1の問題に関しては、日頃から、授業の中で対話のパターンを利用して練習する際に、それが文法・文型や語彙を覚えるための機械的な練習に終わらず、自己表現の手段となるようなバリエーションの作業を行っておく必要がある<sup>13)</sup>。第2の問題については、文体に意識を向けるような学習が必要である。たとえば、文章を短文でぶつ切りにせず並列接続詞の und や aber などを効果的に使う方法、auch の使い方、文中の名詞を適宜人称代名詞で置き換える仕方、テーマ・レーマの関連、構造的に共通な部分を省略して表現する技法、同一の指示対象を別の表現で読み変えて行く欧米系言語に共通する文体的な特徴などを学習の中に組み込むことである<sup>14)15)</sup>。

3つ目の問題は、実は外国語学習にとどまらない普遍的な表現力や作文力に関わ

る問題であり、その意味で一番重要である<sup>16)</sup>。今回、これらの問題を解決するため、準備段階として、アソシオグラム(associogram)を利用した共同作業を設定した。アソシオグラムとは、出発点となる語を中心にして連想される語を次々にまわりに書いて作る図形表現のことで、意味地図または連想地図などとも訳されたりするが、頭の中に漠然とあるイメージやつながりを可視化するための一手段である。



## アソシオグラムによる頭の中の整理

まず黒板の中央に円を描いてその中に ich (自分) と書き、そこからいくつかの足を出す。次に、ich という言葉を聞いて思い浮かべることは何か、自分が一番関心を持っている話題は何か、自分にとって何が一番大切なものか、自分らしさを伝えるためにはどのようなことをいうべきかをキーワードの形でそれぞれ4～5人のグループ作業で考えさせた。その後考えた結果をクラス全体で集めて、板書していった<sup>17)</sup>。前ページの図は、そうしたアソシオグラムを作っている途中の段階を表したものである。思いついた単語はドイツ語で出させることが理想であるが、現実には、初級者の場合ドイツ語で言えるのは、せいぜい Sport, Musik, Freund くらいである<sup>18)</sup>。したがって、ドイツ語で言えなければ日本語でもかまわないとした。ただし、板書する際には、できる限り簡単なドイツ語になおして書いていった。この目的は、まず第1に、いくつかの既習単語を語場によって整理し、活性化することである。

次に、それらのキーワードごとに自分に即した例を考えさせ、具体的な表現に必要な例文や熟語を列挙させていった。ドイツ語での表現がわからない場合は、お互いに相談させたり、教師が教えたりした。この作業の目的は、それぞれの話題に関して自分が何か書こうとするときに必要な表現を個々に自覚させ、あらかじめ作文の際の負担を軽くさせることである。また、何について書くか構成をきちんと決める前に色々な可能性を試させるという意味もある。

## 全体の構成を考える

ここまでの作業を30分ほどやった後、一般的な自己紹介の書き方の一例として、まず名前や出身などの最低限の紹介をした後に、ここに挙げた中からテーマを選んで書くことなどを提案した。そのうえで、何を書くか考えさせ、キーワードを書き出す形で、日本語でもドイツ語でも良いので全体の構成を考えさせた。その際、特に内容に関して、浅く広く書くのではなく、1つか2つのテーマに絞って文のつながりを考えながら話題を展開していくこと、紹介文の中に日本語で自分が自己紹介をするときと同じ程度の意味のある情報量を盛り込むことなどを指導した。また、文体の観点から、まとまったものを並べる仕方や文のつなぎ方などに関し、具体例を挙げて説明した。なお、構成を考える作業は、原則として個別に行わせた。この作業の間、教師は学生の間を回り、質問を受けたり、ドイツ語での言い方がわからないものの表現方法についてアドバイスしたりした。その際のやりとりの一部は、板書の形でクラス全体に返した。授業の最後に5分ほど時間をとって、パートナー作業でお互いのアイデアや構成に関して批評させた。そのうえで残りの作業を行い、それを元に最初の草稿を1週間後までに書いてくることを指示した。また、文体と内容の面で、注意すべき以下の項目はプリントの形で与えた。なお、この授業で出された表現(熟語・例文)から例文リストを作り、次の授業で配布した。

<文体と内容に関し留意すること><sup>19)</sup>

- ・文がぶつ切りになっておらず適度に und 等が使われているか?
- ・内容はつながりがあるか?
- ・前の文と関連のある副詞などは、文頭に出ているか?
- ・話題が変わるときは、段落が変わっているか?
- ・繰り返し表現を避ける工夫がされているか?
- ・他人がつっこんでみたくなるようなおもしろい内容か?
- ・読み手を意識して逆に問を発するようなことをしているか?

なお、作文の過程で疑問が出た場合は、e-mailでの質問を受け付け、答えもe-mailで返した。最初の週にメールしてきたものは、ほんの10人程度で、質問内容は、もっぱらドイツ語での表現方法に関わるものであった。

### 2.3. 第2週の作業 — 共同作業としての文法チェック —

草稿を書いてくることを宿題として課した次の週、クラス全体で文法チェックを行った。これは、実際に自分が書いたものをチェックすることで、これまで学習した文法事項を作文の際に適応できているかどうか確認するためである。

まず、作文チェックリスト<sup>20)</sup>を配り、作文の際に注意すべきことを①基本項目、②動詞の活用、③語順、④格変化、⑤文体と内容の大きく5つの項目に分類し、3回に分けて説明した。その際、各項目の説明ごとに、前年度の学生が書いた作文からとった誤用例<sup>21)</sup>を使って、パートナー作業で添削させ、その後クラス全体でどう直したらいいかを確認していった。以下は、「語順」の項目の説明と添削文の例である。なお、これらは、いずれもすでに既習済みの項目を活性化する作業である。

#### <語順>

- ・活用している動詞や助動詞は第2要素の位置にきているか？
- ・主語以外の要素を文頭に出したとき、主語は第3要素以降に来るが、そうなっているか？
- ・助動詞を使ったとき動詞は原形にして一番後ろに持ってきてあるか？
- ・副詞や副詞句は定動詞に近い前の方の位置にきているか？
- ・代名詞は、副詞よりさらに定動詞に近い位置（大部分は第3要素の位置）にきているか？
- ・und/aber/denn は、語順を数えるときにカウント外だが、そのことは守られているか？
- ・分離動詞では、分離前つづりがちゃんと後ろに行っているか？
- ・行き先を示す言葉は、できるだけ後ろの方にきているか？

添削してみよう

Zweimal pro Woche wir lernen Englisch. Ich kann spreche Englisch sehr gut. Ich fahre nach England gern mit meiner Freundin, Yuko. Ich anrufe jeden Tag sie. Ich liebe sehr sie in der Welt und möchte ich heiraten schon jetzt sie.

それぞれの項目ごとにこの作業を繰り返した後、今度は、学生が書いてきた草稿をパートナー作業で一緒にチェックさせた。その後は、残った授業時間を使って、作文の作業を続けさせた。その間、教師は学生の間を回り、質問を受け付け、必要に応じて助言した。また、一定の間隔で、質問の中で出た重要項目や役に立つ基本表現を板書し、クラス全体で共有した。この授業の最後に、2週間後を目処に各自電子掲示板へ作文を投稿するよう指示し、電子的に書かれたテキストをカットアンドペーストで投稿する方法のデモを再度行った。また、学生には、以下の指示をプリントの形で与えた<sup>22)</sup>。

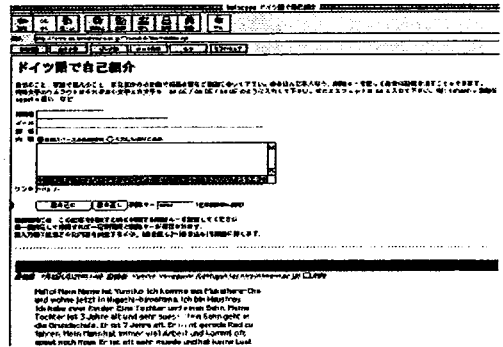
#### <作文にあたって>

- 1) できるだけ、他人の投稿した内容をよく読もう。もしよい表現があったら、それを積極的に(=カットアンドペーストして)利用しよう。
- 2) ただし、その際もただ真似するだけでなく、少しでも良いから自分らしきを出そう。
- 3) 他人にとっておもしろいと思えるような内容を書こう。特に他人に突っ込んでもらえるような内容を心掛けよう。

- 4) 文法的なミスはおそれるな、しかし日本語の単語をそのままドイツ語に置き換えて並べたのは駄目。文の構造を意識し、できるだけ文体に気を使おう。
- 5) 書き直しは自由。最終的に良いものができれば、その過程の努力はすべて積極的に評価します。
- 6) 文法チェック項目で挙げたこと以外の細かいミスは採点の対象としません。文法的な正確さよりも、内容を重視します。

## 2.4. 電子掲示板への書き込み

右の図は、筆者が、作文投稿用にホームページ上に開設した電子掲示板<sup>23)</sup>である。この掲示板に、名前、メールアドレス、作文の題名を入力し、内容欄に作文を書いて、「書き込みボタン」を押すと、それらの情報が、投稿欄に送られ、どこからでも読めるようになる。この掲示板の一つの特徴は、入力の際に削除キーを決めておけば、そのキーを知っている本人に限り、書き込んだ内容を消すことができる点である。したがって、学生は、内容を変えたいと思えば、前に投稿したものを消して再び新しい内容で再投稿することが可能である。しかも、Web 上の内容が更新されるだけでなく、書き込むごとに e-mail の形で書き込んだ内容が教師のもとに送信されてくるため、メーラーを常時たちあげておけば、いつ学生が書き込んで作業したかが、一定の間隔で把握できる。教師の方は、その内容を見ながら個々に e-mail の形で、助言・添削したり、必要ならば、掲示板全体に指示を出したりできる。投稿期間中に私は、平均で一日15通、計200通ほどの e-mail を学生とやりとりした。



## 3. 公的な発表空間としてのインターネット

### 3.1. 自己紹介の作文例

以下は、学生が投稿した作文の例である<sup>24)</sup>。文法的にも単語のつづりにも、まだ多くの初歩的なミスがあり、特に作文例4ではそれが目立つが、限られたドイツ語能力で、工夫して書いていることは、たとえば 2.2. に挙げた、文を並べただけの作文例と比較するとはっきりするであろう。また、まだ教えていない、過去の表現・副文（従属文）・比較級なども、自分で調べたりして部分的に使っているのも特徴的である。

#### 作文例1： Ich spiele gern Tischtennis

Hallo! Mein Name ist Daisuke Shimano. Ich komme aus Yamaguchi. Meine Heimatstadt war einmal berühmt für die Kohle. Aber die Stadt ist jetzt einsamer als Saijo. Aber ich bin gern dort. Denn es gibt viel Erinnerung. Und ich kann dort mich beruhigen. Ich spiele gern Tischtennis und gehöre zum Tischtennis-Klub der Uni. Unsere Mannschaft ist sehr stark. Und die Übung ist sehr hart. In den Sommerferien habe ich einen Tischtenniswettkampf in Yamaguchi. Ich möchte mindestens einmal siegen. Ich habe Freundin, und ihr Name ist Makiko. Sie ist schön! Sie spielt auch gern Tischtennis. Aber ich kann sie nicht oft sehen. Weil sie in Yamaguchi wohnt, bin ich sehr einsam.

作文例 2 : Ich bin traurig. Graff...!!

Guten Tag! Ich heie TAKASHI KATOH. Meine Hobbys sind Tennisspielen und Tennissehen. Meine Linblingstennispielerinnen sind Kimiko Date und Steffi Graf. Aber Kimiko Date spielt nicht mehr Tennis. Und Steffi Graf will auch dieses Jahr aufhren.

Ich bin traurig. Graff...!! Kennst du Steffi Graff? Ja, natrlich!

Sie kommt aus Deutschland. Man nannte sie die Knigin von Rasen.

Ihr Spielenform ist schn und attraktiv. Danke!

作文例 3 : Mein Hobby ist Reisen!

Guten Tag! Mein Name ist Takeshi. Ich komme aus Saga und wohne jetzt in jike, in Higashihiroshima. Kennen Sie Saga? Saga ist eine schne Stadt. Wir haben zwar in Saga das Arita Porzellan und Yoshinogariiseki, eine Ruine zu Yayoi-Zeit(B.C4~A.D3), aber Saga ist nicht so berhmt. Ich bin traurig. Ich mchte fr Saga Reklame machen.

Mein Hobby ist Reisen. Und Ihr Hobby? In den Sommerferien will ich mit meinen Freunden nach Tokyo. Ich fuhr im Mrz auch nach Okinawa. Okinawa hat das schne Meer und viele Blumen. Es gefllt mir sehr gut in Okinawa. Mchten Sie auch nach Okinawa?

Mein Traum ist Mathematiklehrer zu werden. Daher studiere ich Mathematik an der Uni Hiroshima. Ich treibe gern Sport. Tennis spiele ich besonders gern. Ich gehre zum Tennisklub der Uni, und dreimal pro Woche spiele ich Tennis. Ich mchte in Zukunft Mathematiklehrer werden und einen Tennisklub in der Schule leiten. Danke!

作文例 4 : Guten Morgen! Meine Herrschaften!

Hallo! Ich heie Ryota. Ich komme aus Ehime und wohne jetzt allein in Kagamiyama. Ich studiere Mathematik. Ich mchte Mathelehrer werden.

Was ist Ihr Hobby? Ich zeichne gern und hre gern Musik vof Mr.children. Ich teibe gern Sport vor allem gern Baseball spielen. Sehen Sie gern Baseballspiele? Ich bin ein Fan von den Yomiuri Giants, aber ich mag nicht sehr den Hiroshima Carp.

Ich bade gern. Ich bade und sage "Ah". Die Zeit ist sehr gut. Was meinen Sie dazu?

Ich gre gern, "Guten Morgen! Guten Tag! Danke und bitte". Mein Herz hat sich aufheitern. Ja, will ihr mitsagen "Guten Tag!".

Was haben Sie in den Sommerferien vor? Ich will nach Ehime fahren und Freunde treffen. Wir wollen zusammen an die See gehen, Campe auf einer Insel machen, die Insel heit Nakajima.

Ich will in Ehime jobben. Ich habe den Fhrerschein machen und mchte ein Fahrrad haben. Ich habe viele Programm in den Sommerferien. Das Herz hpfe! Danke schn!!

### 3.2. 意義

筆者は、初級段階の学習者(学生)に対してドイツ語での自己紹介を書くという課題をここ数年出し続けてきた。最初のうちは、あらかじめ予告して、前期の筆記テストの一部として書かせるという形態であった。昨年('98年)、はじめて、e-mailを使って提出させ、添削して返すなどの形も試みた。しかし、大部分の学生諸君は、習った文型の単語の一部を差し替えてをそのまま並べるだけで、読んでおもしろいと思えるような作文に出会う確率は、全体の10パーセント程度であった。内容的に冒険をして文法的なミスをするよりは、習った文をそのまま使った方が安全だと考えたのか、内容的にも変わりばえしないものが多く、総じてあまり努力していないとい



う印象を受けた。また、逆に努力して書こうとしている部分でも、表現の枠組みがわからず、日本語の表現を、ただ辞書を使って単語レベルでドイツ語に置き換えただけであきらめてしまうという、中途半端なケースも多く見られた。それに対し、今年度、電子掲示板に書き込むという形で学生諸君が提出した作文は、これまでとはかなり違っていた。文法的な面でも全体として向上しているが、一番大きな違いは作文の内容面での多様さであり、ほとんどの学生が皆それぞれに努力して、それなりのことを書いてきた点である。課題を出した時点までの、実質的な学習時間（2ヵ月半）や既習項目を考えると、その結果は筆者の予想を超えるものであった。その理由の一端は、例年以上に準備作業に時間を割いたこともあるが、やはり一番の違いは、提出の形式として電子掲示板を利用したことによる効果であろう。それは、大きく以下の3つにまとめられる。

### 1) インターネット上の電子掲示板の公的な発表空間としての性格が、作業の動機づけに役立った

これまでの課題作文は、基本的には、与えられたテーマで書いた作文を、学習者が教師に対して提出し、教師の側はそれを添削・採点して返すというものであった。したがって、学習者にとって、作文を提出することの直接の動機は、「成績のため」であり、作文は採点のために読む教師一人に向けて書かれるものでしかなかった。課題の内容が、いくら自己紹介となっていて、それは、本来の自己紹介のあり方からはほど遠く、学習者の問題意識が内容面の豊かさではなく、文法的なミスをしないうという形式面での整合性を追求する方向へ集中したのもある意味ではやむを得ないことであった。しかし、今回は、電子掲示板を使うことで、書いたものが、公的な場へと発信されることになった。そのため、学生は読み手を意識するようになり、「友達にも見られるから恥をかかないように一生懸命書いた」<sup>25)</sup>という発言に見られるように、課題自体が評価のための提出物としての性格を持つだけでなく、本来のコミュニケーション（自己表現）としての性格を取り戻すことになった。実際、今回、書いた作品をより良くしようとする学習者の努力は顕著で、約31%の学生諸君が書き直して2度以上投稿し、3度以上投稿を繰り返したのも全体の12%にのぼった<sup>26)</sup>。また、多くの諸君が、e-mailや研究室の直接訪問という形で、ドイツ語での表現方法等をめぐって様々な質問をしてきた。

一般に、学習を動機づけるため、作文やレポート等を教師に対して提出させるだけでなく、広く読んでもらうことを目的として、印刷してクラス全体に返したり、作品集や新聞などの形で出したりすることなどは、これまでも、様々な形で行われてきた。その意味で、発表の媒体としてインターネット上の電子掲示板を使うことは、授業を教室外へ開いていこうとするこれまでの試みの延長線上にあるものだと言える。しかし、従来は、①たとえばクラス内やせいぜい一定の閉ざされた範囲内ではしか公開できなかったこと、②最終的な結果を公開するにとどまり学習課程そのものの公開（＝共有）はできなかったこと、③また本格的な作文集や新聞の制作はお金と作業の両面で多くのコストを要し日常的には行い得なかったことなどの問題もあった。公的な発表媒体としての電子掲示板を利用することによって、こうした制約の多くは取り払われ、教室外の社会へ向けた学習者の自己表現と自己発信が、手軽な形で可能になり、学習活動の中に本来のコミュニケーションを取り込むことがより容易になってきた。

## 2) 公的な発表空間を通して学習者相互の学習が可能になり、学習者の自立性が増した。

お互いの投稿を読んで参考にし、良い表現は積極的に利用するよう指導したが、実際に多くの学生は、それを行った。これにより、学習者同士が、お互いの作文を媒介にして、相互学習することが可能になった。また、何度も投稿を繰り返した学生の中には、「人を見て、自分のは少なすぎると思って書き足した」、「良い表現があったので変えてみた」等のお互いを意識した動機が多く見られた。なお、他人の投稿が読めるという条件によってとりわけ助けられたのは、必ずしも授業に積極的ではなく、やや習熟度の低い学習者である。例年、「まじめにやっていないので、作文なんて全然できません」と泣きついてくる学生がいるが、そうした諸君に対しては、意識的に、「すぐ投稿するのではなく、他の学生が投稿するのを待って、それを参考にして書きなさい」と指導した。彼らの多くは、他の学習者の投稿によって、表現のための枠組みを得られ、ある程度の作文を書くことができた。その結果、自由に書いている割には、でたらめに単語を並べただけというケースが、例年に比べて減少した。また、学習者が、教師の指摘を一方的に受け入れて直すというのではなく、他人の作品を読んで、自分の判断で、良いと思ったところを取り入れるなど、学習者の自立性が増した。そのことは、たとえば、話法の助動詞<sup>27)</sup>や過去の表現などの、教師としてはむしろ使わない方向で指導した表現や文型なども、学生諸君は、お互いに参考にしながらか、自分の判断で取り入れたりしていたことにも表れている。

## 3) 教師の余分な負担が減り、別の作業に集中できるようになった。

掲示板上の作品を共通の出発点にすることができたので、メール等のやりとりの中で教師が助言する場合も、すべて一人で添削したり教えたりするのではなく、「××の表現の仕方は、〇〇さんの自己紹介を参考にしてごらん」というような形で、ある程度他の学生の作文に振ることができた。そのため、昨年度に、課題作文をメールで提出させ、添削して返したときに比べ、教師の負担は格段に減った。その分、教師は、学生間の交通整理をしたり、必要な情報を参照させたり、激励や助言をしたりする、これまでとは別の役割において、より多く時間を割くことができた。

### 3.3. 問題点

電子掲示板を課題作文の発表空間として使う場合の問題点ないしは考慮すべき点と思われるのは、以下の3つである。

#### 1) 最終的にできた作品の誤りを、どの時点で、どのような方法で、どこまで直すか。

学習者がお互いの作文を参考にして学びながら、自由に投稿するということは、時に、誤った表現を学び(=模倣し)あうという問題を起こす。初級段階の学習者がお互いに学習言語を用いた言語活動を続けることは、たとえ誤った表現を使いながらであっても外国語習得にとって、必ずしもマイナスにはならない<sup>28)</sup>ことは、すでに理論的にも指摘されている。また経験的にも、実際に文を構成することを通してしか、ドイツ語文の基本構造に関わる文法的な知識(動詞の人称変化・定形2位・枠構造など)が定着しないことも周知の事実である。したがって、学習者同士が、教師とは相対的に独立して、間違いを共有するケースに対しては、教師の側がそれをチェックできている限りは、初級の段階では、それほど気にする必要

がないかもしれない。しかし、問題は、書かれた作文に残る間違いを、どの段階で、どのような方法で、しかも、どこまで直すかである。

どこまで直すべきかに関しては、授業の中で行った作文チェックの際に、既習項目の中からいくつかのガイドラインを示してあるので、その範囲にとどめておくという考え方もある。ただし、これはいつの時点で直させるかということにも関わる。何人かの学生は、既習項目以外の文型や表現を自分の判断で、作文の中で使っているが、そうしたものの中には、誤りも多い。しかし、課題作文を、締め切り直後のまだそれらを習っていない最初歩の段階で直す場合、こうした未習事項に関わる誤りもすべて直させるべきかどうかは、難しい問題である。逆に、この作文はいったんこのままにしておき、時間をおいて1年生後期の、学習の進んだ、しかるべき時期にもう一度取り上げ、その時点での既習項目を基準にして直させるという方法もある。それにしても、その際もすべてのミスをつぶすべきであろうか。書かれたものが残り、インターネット上で公開し続けられる以上、やはり最終的にミスのない形にしておくべきであろうが、そう考えるにしても、どうやって直させるべきかの問題は依然として残る。一番簡単なのは、教師が、残ったミスを最終的に添削して、全員に再投稿させることである。しかし、学習者の自立性を尊重してきたこれまでの方法を考えると、正解を与えるようなやり方が望ましいかは、考えものである。かといって、問題点の箇所だけを指摘し、後は学習者に考えさせて細かいところまで直させるという手間のかかる方式をとることは、対象になっている学生の人数を考慮すると事実上不可能であり、些末的なミスを見つけただす作業が、学生にとっても、おもしろいとはとても思えない。一律に判断の下せない問題である。

## 2) 課題作文の内容をどうやって音声に結びつけるか

今回の課題作文においては、文字を媒介としたリアルタイム・コミュニケーション能力の養成をひとつの目的に挙げたが、コミュニケーションの基本は、やはり口答コミュニケーションであり、こうした自己紹介を、最終的に音声の形に戻すというステップは必要であろう。一般に、自己紹介といっても、既習の文型の単語を一部差し替えて、ただ文を並べただけのものであれば、それらの文型は、授業中の対話練習を通じて学習してきているので、書かれたものを音声化させることはそれほど難しいことではない。実際、自己紹介をカセットに吹き込んで提出させ、発音診断シートをつけて返すような指導を、筆者はここ数年続けてきた。ただ今回のように、作文内容が広がり、使われる単語のレパートリーも増え、話題化による倒置・強調・省略などテキストレベルで音韻的に考慮すべき要素が多く含まれる場合には、それを個々に意識化させるようなステップ抜きに単純に録音させるわけにはいかない。こうした指導をどのような形で具体的に授業の中に組み込むかは今後に残された課題である。

なお、そうした学習を最終的にどうやって集約するかという点に関して言えば、考えられる一つの方法は、個々に録音させるのではなく、インタビュー形式を導入して、パートナー作業で録音させることである。また、もう少しおもしろいのは、デジタルビデオ等を利用して、お互いに撮らせ合うような形式である。こうしてできた作品のインターネット上での公開方法については、今のところ RealNetworks<sup>29)</sup>などのストリーミング技術を利用することが最も簡単である。音声やビデオ画像のデジタル化と編集にはまだ技術的な制約もあり、現状では誰もが簡単に行えるわけではない。また電子掲示板にテキストを投稿するような簡単な公開方法もまだ無い。したがって、これらの作業は、すべて教師の側が引き受けなけれ

ばならない。しかし、多少の労力ををいとわないのであれば、ホームページ上で音声配信することは可能である<sup>30)</sup>。また、デジタルビデオ画像についても、たとえば大学レベルでVODサーバーなどが導入されれば、ネットワーク上で公開することができる。筆者もそうした環境を広島大学で現在構築中である<sup>31)</sup>。

### 3) プライバシーや個人情報の保護に関わる問題

通常の電子掲示板への投稿は、投稿者の自由意志による行為であり、何をどこまで書くかは投稿者の自己責任にゆだねられる。しかし、課題作文の場合は、投稿は、学習活動の一環として課せられた義務であり、学習者の側には選択の余地がない。したがって、教師の側には、学生が投稿によってそのプライバシーが侵害されたり、個人情報が流出したりする危険にさらされることがないように、保護する義務がある。今回のような自己紹介の場合、とりわけ、ネット上のストーカー行為の対象にならないよう、住所や電話番号等の個人が特定される情報を書かないよう指導したり、そうした情報が間違っていないかチェックしなければならぬ<sup>32)</sup>。インターネット上の電子掲示板という、誰にでも開かれている公共空間には、一方で潜在的にそういうネガティブな面があるということを考慮し、場合によっては、そのために本来望ましい機能が制限されるようなケースも受け入れざるを得ない<sup>33)</sup>。

## 4. おわりに

本稿では、学習開始後2カ月半という最初歩の段階の学習者に対する課題作文を例にとって、インターネット上の電子掲示板の外国授業への応用可能性を論じてきた。しかし、こうした課題作文への電子掲示板の応用は必ずしも一回限りの特殊なプロジェクトとは限らない。学習開始後1年以内のドイツ語の初級者を例にとっても、学習のそれぞれの段階で、たとえば以下のようなそのときどきの課題で、同じように実施可能である。また、授業時間内での投稿を前提にしないのであれば、普通教室で行う授業の一環として組み込むこともできる<sup>34)</sup>。

#### <課題作文>

- 私の宝物（対象の叙述・従属接続詞を利用した理由の説明）
- 私の夏休み（現在完了を利用した過去や体験の表現・主観的な判断や評価）
- 履歴書ないしは生い立ちの記（年号表現と過去形による自己の経歴の客観的な叙述）
- 冬休みの予定（話法の助動詞を利用した希望や願望の表現）
- 春休みの旅行計画（時間表現と分離動詞を利用した出来事の順序立てた叙述）
- もしあなたが○○だったら（接続法と条件文を利用した根拠づけられた主張）

なお、こうした課題作文の出題の仕方には、たとえば長期休暇中の宿題のように、授業とは相対的に独立して書かせる場合もあれば、今回のように、授業のなかで準備作業を行ってから書かせるという方式もある。また、すべてを1回の授業（90分）で行うことも可能である。その場合は、たとえば短いビデオクリップ・絵・テキストなどのいずれかの形で、あらかじめ課題に関連する情報を与え、アソシオグラム等を使って関連する語場を活性化してから、2～3人の小グループの作業<sup>35)</sup>で数個の文からなる短い文章を自由に書かせるというような方式が考えられる<sup>36)</sup>。20人以下の参加者からなる少人数授業の場合、この方式なら出てくる結果の絶対数が少ないので、授業の最後に10～15分程度の時間をとれば、電子掲示板を使わなくても、実写カメラやOHPある

いはホワイトボードなどを使ってプレゼンテーションすることは可能である。ただし、初級者を対象とした外国語授業は、40人を超える規模であることが多く、その場合はすべてを授業時間内に扱えるわけではない。その点で、投稿結果も残り、後からでもアクセスしたり再利用したりできる電子掲示板は、大人数授業における提出課題の、授業内外をつなぐプレゼンテーション手段としても有効である。

## 付録

<君のドイツ語作文チェックリスト>

### 全般

- ・コンマやピリオドや?や!のあとは、ちゃんと半角の空白を入れているか?
- ・名詞は大文字になっているか?形容詞は逆に小文字になっているか?
- ・Sieは大文字で、ichは小文字になっているか?

添削しよう

Guten tag!Ich heie Taro Hiroshima,und komme aus Osaka.Ich spreche italienisch.  
Und Ich esse auch gern Italienisch.Und sie? Essen sie auch pizza?

### 動詞の活用

- ・主語にあわせて動詞がきちんと活用されているか?
- ・arbeiten/mieten/finden/ffnen/ rechnen /zeichnen/ atmen などは2・3人称で口調上のeが入るがそのことは守られているか?
- ・reisen/heien/tanzen などは、2人称でもtの語尾しかつかないが守られているか?
- ・sein動詞は、sind/bin/ist/bist/seidなどと不規則に活用するが、それはできているか?
- ・habenは2・3人称単数でhast/hatと不規則に活用するが、それはできているか?
- ・fahren/gefallen // sprechen/lesen/sehen/essen/geben 等是不規則動詞。2・3人称で語幹の母音が変化するが、それはできているか?

添削しよう

Mein Vater arbeit sehr fleiig. Aber er habt auch viele Hobbys.Er lest gern und seht oft Videos. Er zeichnt auch sehr gut und spricht perfekt Englisch. Er esst sehr gern Hamburger und trinkt gern Cola Ich hren nicht gern Musik. Aber mein Vater bin sehr musikalisch.Utada Hikaru gefallt ihm sehr gut. Er geht gern ins Karaokehaus und tanzt auch gern in der Disco. Tanzst du auch gern?

### 語順

- ・活用している動詞や助動詞は第2要素の位置にきているか?
- ・主語以外の要素を前に出したとき、主語は第3要素以降に来るが、そうになっているか?
- ・助動詞を使ったとき動詞は原形にして一番後ろに持ってきてあるか?
- ・副詞や副詞句は定動詞に近い前の方の位置にきているか?
- ・代名詞は、副詞よりさらに定動詞に近い位置(大部分は第3要素の位置)にきているか?
- ・und/aber/dennは、語順を数えるときにカウント外だが、そのことは守られているか?
- ・分離動詞では、分離前つづりがちゃんと後ろに行っているか?
- ・行き先を示す言葉は、できるだけ後ろの方にきているか?

添削しよう

Zweimal pro Woche wir lernen Deutsch. Ich kann spreche Deutsch sehr gut. Ich fahre

nach Deutschland gern mit meiner Freundin, Yuko. Ich anrufe jeden Tag sie. Ich liebe sehr sie in der Welt und möchte ich sie heiraten schon jetzt.

### 格変化

- 名詞の性は間違いがないか？
- 名詞の性は自然界の性とは関係なく、たとえば男性名詞は、ものでも er で受けるがそうした規則は守られているか？
- 単数形の数えられる名詞は、ふつう冠詞を使うが、ちゃんとしているか？
- 日本語で「ある○○」というときは不定冠詞を、限定できるときは定冠詞を使うが、そうになっているか？
- 複数形は、「もろもろの○○」というニュアンスの場合は無冠詞で使うが、それ以外は冠詞が必要。ちゃんとできているか？
- 固有名詞をを後ろに伴うようなケースでは、たとえば、die Universität Hiroshima のように、名詞には定冠詞を使うが、そうになっているか？
- 主語と主格補語の名詞は1格になっているか。
- 他動詞の目的語になっている名詞の冠詞はちゃんと4格になっているか？
- 動詞 gefallen / helfen / stehen (=～に似合う)等は3格目的語を取るが、ちゃんとそうになっているか？
- mit/zu/bei は3格支配だが、守られているか？ 特に zu は定冠詞と使われると zum か zur になるがそうになっているか
- in/an/auf/über/zwischen/vor/hinter/unter/neben 等は場所か移動かでそれぞれ3格とも4格とも使うがそのことは守られているか？

添削しよう

Ich habe der Hund. Es ist sehr intelligent. Es hilft mich immer. Ich finde es super.  
Ich gehe oft mit mein Hund spazieren.  
Er schläft gern in sein Hütte. Möchtest du auch Hund?

### 文体と内容

(略)

## 参考文献

- 秋本祥一・古川剛(1997):『CGI入門プログラミング入門』翔泳社.
- 第1回ドイツ語教授法ゼミナール実行委員会(編)(1993):『第1回ドイツ語教授法ゼミナール報告 (Dokumentation des 1. Didaktikseminars für japanische Germanisten 1992)』  
東京ドイツ文化センター.
- Debski, R./Levy, M. (1999): *World CALL - Global Perspectives on Computer-Assisted Language Learning* .  
Swets & Zeitlinger.
- Funk, H. (1999): *Lehrwerke und andere neue Medien, - zur Integration rechnergestützter Verfahren in den Unterrichtsalltag*. Ms.
- Gass, S.M. (1997): *Input, Interaction, and the Second Language Learner*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Grüner, M./Hassert, T. (1990): *Computer im Unterricht - Voraussetzungen Möglichkeiten Grenzen* .  
Goethe-Institut.
- Hässermann, U./Piepho, H. (1990): *Aufgabenhandbuch — Deutsch als Fremdsprache Abriß einer Aufgaben- und Übungstypologie* . indicum.
- 岩崎克己(1999): 初修外国語授業支援のための自習用オンライン自動採点ドリル.  
『広島外国語教育研究2』広島大学外国語教育研究センター.
- 金田道和(編)(1997):『英語教育学モノグラフ・シリーズ 英語の授業分析』大修館.
- Levy, M. (1997): *Computer-Assisted Language Learning: Context and Conceptualization*. Oxford University Press.
- Malamah-Thomas, A. (1987): *Classroom Interaction*. Oxford University Press.
- Neuner, G. (1995): *Aufgaben und Übungsgeschehen im Deutschunterricht. Fremdsprache Deutsch 10*.  
日本独文学会ドイツ語教育部会ドイツ語教育に関する調査研究委員会(編)(1999):  
『ドイツ語教育の現状と課題—アンケートの結果から改善の道を探る』.
- Oxford, R.L. (1990): *Language Learning Strategies: What every Teacher Should Know*. Newbury House.  
(邦訳『言語学習ストラテジー』凡人社 1994)
- 三瓶慎一(1999): 設置基準大綱化以降の大学のドイツ語教育における基本理念—社会科学系学部におけるコンセプトとその実践—. 『教養論叢』第104号, 慶應義塾大学法学研究会.
- 塩澤正/Schiefelbein, S. (1998): 『インターネット英語表現辞典』 NTT 出版.
- 早稲田大学文学部情報化検討委員会(編)(1998): 『インターネットで変わる英語教育』  
早稲田大学出版部.
- 山内豊(1996): 『インターネットを活用した英語授業』 NTT 出版.

## 注

- 1) インターネットの持つ公共的空間としての性格の外国語授業への応用可能性について筆者が最初に教示を受けたのは、1998年12月11日、広島大学外国語教育研究センター第4回研究集会(講演会)「インターネット時代の協調的学習環境と言語教育の役割」において情報英語の授業における取り組みを中心に講演された尾関修治先生(中部大学国際関係学部)である。CALL授業の新しい展開の可能性について、教えていただいたことを感謝している。
- 2) チューター的な機能の典型は、いわゆる学習用のコンピュータプログラムである。これには、主に自習用のものと授業の中で使われるものの2つのタイプがある。便利な道具としての機能の典型は、ワープロであるが、他にプレゼンテーション用のソフトなども研究発表や授業などの場でかなり使われるようになってきている。公共的な発表や議論の場を提供する機能の例としては、本稿で取り上げる電子掲示板の他に、chatプログラム・メーリングリストなどもある。また、そもそも個々のホームページそのものが、同時にそうした機能を担っていることが多い。コミュニケーション手段としての機能の典型は、e-mailであろう。情報源としての機能はホームページの基本的な機能であり、特に外国語学習者にとって、学習言語の言語・文化圏で作られているホームページは、程度の差はあれ、みな情報の宝庫である。

なお、これらの機能のうちチューター的な機能以外は、すべて、広い意味での道具(手段)としての機能の中にくることができる。この2分法についてはLevy(1997)参照。なお、この2分法は、註3の中で触れているCALL授業の2つのプロトタイプ(「学習ソフトを使ったCALL」と「プロジェクト型のCALL」)に、それぞれ対応する。
- 3) CALL授業のもっともよく知られたプロトタイプは、「CALLとはLL+コンピュータである」という定義(1999年度日本独文学会秋期研究発表会「シンポジウムI コンピュータ支援ドイツ語学習(CALL)の現状と展望」における大阪大学 細谷行輝先生の定義)に見られるように、「学習ソフトを使ったCALL」である。すなわち、一定数のコンピュータが整備された部屋で、ヘッドセットを付けた個々の学生が与えられたコースウェアを使って、自分のペースで学習を進めるというものである。その場合の媒体は、マルチメディアを駆使したものではCD-ROM教材などが多く、オンライン型教材を使う場合には、一部の音声や画像等を伴った説明のページとオンラインドリルなどに限られるのが一般的である。「学習ソフトを使ったCALL」の制度的な問題点は、コンピュータが整備された外国語学習専用教室を持つ大学が少なく、どこでも実施できるわけではないこと、また1年間を通して使えるコースウェアを整備することの困難さなどであり、教育理論的な問題点は、教師と学習者が会する授業の場でしかできないコミュニケーション的な練習の機会が、こうしたコンピュータと学習者の間での記号操作レベルの練習によって逆に少なくなってしまうことへの懸念であろう。CALL授業のもう一つのプロトタイプは、インターネットなどを情報源や発表の場として利用したいいわゆる「プロジェクト型のCALL」である。ちなみに、本稿で紹介する授業もこのタイプに属する。ドイツ語学習の分野で「プロジェクト型のCALL」の授業に役立つページとして有名なものには、Goethe-InstitutのKaleidskop (<http://www.goethe.de/z/50/alltag/deindex.htm>)やDeutsch lernen mit 'jetzt online' (<http://www.goethe.de/z/jetzt/deindex.htm>)、あるいはDeutschWelle (<http://www.dwelle.de/>)などがある。なお、ドイツの旅行案内(<http://www.fremdenverkehr.de/>)や鉄道会社DW (<http://www.bahn.de/home/index.shtml>)・航空会社Lufthansa (<http://www.lufthansa.com/on-line-schedule/>)のオンライン時刻案内を利用したプロジェクト型授業については、本紀要掲載の吉田論文にその実践報告がある。
- 4) 学習のストラテジーに関してはOxford(1990)参照。
- 5) ここでは、初修外国語と言いながらも、ひとまずドイツ語やフランス語等の西ヨーロッパ系言語だけに話しを限りたい。というのも、これらは、たとえばラテン系の語彙に起源を持ついわゆる国際共通語の存在、文法構造や文体的な特徴、文化的・社会的な背景的知識などの点で英語と多くの共通点



を持ち、既習外国語である英語を学んだ際に得た知識を、当初から（意識的あるいは無意識的に）手がかりとして利用できる言語だからである。

6) 金田(1986)参照。

7) 『塩澤 / Schiefelbein (1998) 第1章参照。

8) 今回使った電子掲示板については本稿の2.4参照。これは、ネットワーク上で公開されている電子掲示板用の CGI プログラム MiniBBS ver 8.8 をもとに、筆者が、ページのレイアウトや配色・表題・投稿原稿の文字数・投稿の表示数をカスタマイズして、ホームページ上に開設したものである。もとの CGI プログラムは以下の URL から無料でダウンロードできる (<http://www.rescue.ne.jp/>)。

9) 今回の課題作文は、2つの大学の3クラスにまたがって、計130人の学生を対象に実施した。そのうちの2クラスの学生はそれぞれ週1回しかドイツ語の授業を受けていない。1クラスのみが週2回ドイツ語授業を受けている。週1回のクラスと週2回のクラスでは、当然進度が違うので、それにより指導内容や時間配分に差がある。本稿で紹介するのは、主に、週2回のクラスでの指導例である。以下は、課題作文の授業を開始した時点での条件である。

1クラス44人の授業で90分授業×22回受講済み

1クラス26人の授業で90分授業×11回受講済み

1クラス60人の授業で90分授業×10回受講済み

10) ここで設定した学習項目は、基本的には、すべてそれまでに授業で扱っている既習項目である。ただし、\*印の付いた項目は、週に1回しか授業を受けていない学生諸君はまだ習っておらず、したがって、週2回授業を受けている学生諸君（約44名）に対してのみ学習項目として設定した。

11) 基本動詞は以下の40個である。ただしこの目標は、週2回授業を受けていたクラスのみに適用した。  
haben / sein / heißen / kommen / wohnen / lernen / studieren / lernen / spielen / treiben / arbeiten / machen / hören / singen / sprechen / trinken / essen / lesen / sehen / fahren / gehen / reisen / spazierengehen / sammeln / gefallen / gehören / stellen / stehen / legen / liegen / hängen / helfen / geben / besuchen / kaufen / schenken / schicken / anrufen / nehmen / finden

12) これは、'97年前期テストの問題の一つとして自己紹介を課したときの答案の一つである。ただし、名前と出身地名は変えてある。文法的なミスはなく、「短文に換算して15~20の文で自己紹介を行う」という形式的な条件は完璧に満たしている。なお、この作文に母親が出てこないのは、本人の話では、「Mutter (母親) のつづりに自信がなかったので、書いて減点されることを心配したため」だそうである。

13) このことは、対話のパターン練習の際に、キューとしての単語をいくつか余分に教えるという程度の作業では実現できない。たとえば、現在完了の練習でよく使われる Was haben Sie am Wochenende gemacht? -- Ich habe \_\_\_ gespielt. (週末に何をしましたか? -- 私は〇〇 [スポーツ] をしました) という対話のパターン練習で、ある学生が、週末に卓球をしたという場合も、Tischtennis という単語を教えるだけで、その学生の自己表現の欲求を満足させることができるかは、甚だ疑問である。実際彼に同じことを日本語で質問すれば、たとえば「僕は卓球のサークルをやっているんですけど、昨日、地区の大会があったんですよ」というようないくつかの文からなる情報が返って来るはずである。対話のパターンのバリエーションという場合は、パターン練習で習う文型を最終的にはこのような関連したいくつかの文からなるまとまりの中に埋め込んで表現できるところまで、持ってくる必要がある。もちろん、各個人に関わる具体的な表現のレベルに踏み込むと基本表現以外にも、覚えるものが増えてしまうという問題は出てくる。しかし、全員がマスターすべき項目と、個々人が自分に即して必要なものだけを覚える項目を分けることで、その問題は回避できる。こうしたレベルの踏み込んだ練習を、日常的に授業でやっておけば、課題作文の場合も、各個人がバリエーションの表現や例文を持っているので、すべての表現を一から教える必要はなく、作業がしやすい。

14) これらの中には英語学習で体験的に習っていることも多い。したがって、初級段階では、理論的な

## ABSTRACT

### **Internet and Foreign Language Learning: Utilizing an Electronic Bulletin Board to Improve the Quality of Students' German Compositions**

Katsumi Iwasaki

Institute for Foreign Language Research  
and Education, Hiroshima University

Internet's electronic bulletin boards can be used very successfully in foreign language classes. This paper reports on a small project which was carried out in a beginning German composition class. The university students, who had studied German only two-and-a-half months, wrote self-introductions of 15-20 German sentences, and, instead of submitting them in paper form to the teacher, they put them on an electronic bulletin board.

This task is relatively difficult for beginners because they must mobilize all of their language abilities in German, including knowledge of grammar, sentence patterns, vocabulary, and language learning strategies. So, two full class periods were devoted to the project. The procedure of the project looks like this:

- 1) In the first class period:
  - Activate vocabulary and expressions needed by means of associogram (group work and teacher-centered instruction)
  - conceptualize and structure the composition with key words (individual work)
  - mutual evaluation of the first concepts (pair work)
- 2) Homework during the first week:
  - Write the first drafts and ask questions by e-mail
- 3) In the second class period:
  - Confirm the grammar with a grammar check sheet and correct errors in an example text (teacher-centered instruction and pair work)
  - Correct errors in the drafts using the check sheet (pair work)
- 4) Homework during the second week:
  - Write and put the compositions on the electronic bulletin board within 2 weeks
  - Ask questions via e-mail

The resulting compositions, as a whole, are both grammatically better and more interesting than those in recent years which were submitted only to the teacher and not put on the bulletin board. (See the results on the web page '<http://home.hiroshima-u.ac.jp/katsuiwa>'.)

The public nature of an electronic bulletin board motivates students because not only

the teacher but also classmates and friends read the writings. The bulletin board which was used in this project permits every contributor to set his or her own secret code, with which the student can also remove what was written before. It means that students can always modify or rewrite their self-introductions. Students can read each others' compositions, and if they find good expressions in them, they can modify their own compositions. In this way, students can teach themselves. It was found that 32% of students later rewrote their self-introductions, and 12% of students rewrote them more than three times.

An electronic bulletin board used as a common platform increases not only the motivation but also the autonomy of learners. Furthermore, it frees teachers from routine correction work, and changes the role of a teacher from an absolute all-knower to a navigator for learners.